

「待つということには、どこか、年輪を重ねてようやく、といったところがありそうだ。痛い思いをいっぱいして、どうすることもできなくて、時間が経つのをじっと息を殺して待って、じぶんを空白にしてただ待って、そしてようやくそれをときには忘れることもできるようになってはじめて、時が解決してくれたと言いうるようなことも起こって、でもやはり思っていたようにはならなくて、それであらためて、独りではどうにもならないことと思い定めて、何かにはなく祈りながら何事にも期待をかけないようにする、そんな情けない癖もしっかりついて、でもじっと見るともなく見つづけることだけは放棄しないで、そのうちじっと見ているだけのじぶんが哀れになって、臉を伏せて、やがてここにいるということじたいが苦痛になって、それでも自分の存在を消すことはできないで…。そんな想いを澱のようにため込むなかで、ひとはようやく待つことなく待つという姿勢を身につけるのかもしれない」。作家、鷺田清一さんの言葉です。「待つことなく待つ」、それは、ある人の言葉を借りれば「断念の後の悟り」とでも言うべきもので、将来へのあらゆる期待がすっかり崩されて初めて、人は自分の手の内から大なるものへと希望を明け渡そうとする、委ねようとするということでもあります。

「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」（24節）。人が避けることのできない「定め」の様なものを感じます。しかし、枯れゆくべきものが枯れ、散りゆくべきものが散り、滅びゆくべきものが滅びないと、永遠なるものが輝かない、それがなんであるかに気づくことができないということでもあるのでしょうか。ペトロの手紙が語る「生き生きとした希望」とは、「終わりの時に現されるように準備されている救い」（5節）のことです。それは、「死者の中からのイエス・キリストの復活」（3節）が指し示しているように、私達が「終わり」だと思える時を神が「始まり」の時に変えられる救いを意味します。人の一生は、断念の連続です。しかし、たとえ私達の期待していたものが朽ちて、汚れて、しぼんでも、それはかえって、「天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ」（4節）機会となり、「わたしたちを新たに生まれさせ」（3節）る時となることを聖書のみ言葉は示しています。そんな生き生きとした希望に、私達は守られているのです。

（文責：望月達朗牧師）

